

千里・住まいのセミナー  
「千里で住む、働く、楽しむ」

2022年2月27日(日)14:00-16:00

お話:

- ー岡本昭子さん(インテリアデザイナー)
- ー吉武宗平さん(ランドスケープアーキテクト)

コメント:

- ー豊留孝治さん(環境照明デザイナー)
- ー寺脇和雄(千里パブリックデザイン)

図書紹介: 鬼東崇寛(吹田市立千里図書館)

聞き手: 奥居武(千里パブリックデザイン)

### 奥居

千里・住まいのセミナー「千里で住む、働く、楽しむ」を始めます。私は進行役の、千里ニュータウンに住んで58年になる千里ニュータウンマニアの奥居と申します。

このセミナーは、特定非営利活動法人「千里・住まいの学校」の企画として2017年に千里中央の千里コラボで行い、2019年から2020年に千里ニュータウン情報館でシリーズ開催していましたが、途中でコロナ禍になり2回を残してお休みとなっていました。

今回オンラインで復活となり、2020年に登場予定だった岡本昭子さんと吉武宗平さんに、それぞれ30分程度お話いただき、千里での住まいが楽しくなるヒントをいただきます。後半は皆様からコメントをいただき、吹田市立千里図書館から図書のご紹介もあります。

それではまず、千里をベースに活躍中のインテリアデザイナー、岡本昭子さんからお話をいただきます。よろしくお願いします。

## 半径2キロ圏内での暮らし完結にあこがれて

### 岡本

皆様はじめまして、岡本昭子です。インテリアデザインを生業にしています。千里に生まれて千里っ子です。そんな私の仕事と絡めて、「千里で住む、働く、楽しむ」のどれも実践中なので、話が回ってきたのだと思います。

屋号は「インテリアデザインオフィス人力工房」。一人でやっていますが人の力の工房。人の力を借りないとやっていけないという感じのネーミングでやっております。写真は自宅です。

千里で住んだ所ですが、まず桃山台が実家で、その次に山田に住み、次に佐竹台、高野台…と狭い範囲で引っ



越してきました。

自宅の近所でお仕事をさせていただいたところを記録すると、半径 2 キロ圏内に多くが入ります。半径 2 キロ圏内で生活と仕事を完結させたいと豪語しているところが奥居さんの琴線に触れたようです。家から自転車で行ける範囲。もともとめんどくさがりなので、現場にすぐ行けるといいなど。リフォームなどで現場にすぐ行ける。お宅にすぐ伺ってお話ができるのは仕事をするうえでもメリットがあり、お近くで仕事をさせていただけるのはいいなあと思っています。

千里中央にはクルマで行くことが多いですが、夜間仕事の時には夜中に呼ばれてすぐに行ったり朝 5 時に行くこともできます。現在進行中の物件もギリギリ 2 キロ圏内。またインテリアの仕事とは違うお仕事も家から 1 キロのところであり、自宅近くで働くメリットを感じています。母校の千里高校でもスペイン語を教えているのですが、通勤時間は自転車で 5 分、急げば 4 分半というところでやっております。ちなみに高校時代も実家からは徒歩圏内ですが、いつもギリギリで走って行っておりました。それが私の運動でしたね。

最初から家の近所だけで暮らしたいという人間ではなくて、学生時代はバックパッカーであちらこちら行っていました。就職してからは海外で働きたいという下心、願いが通じましてイギリスにも研修などで 2 年弱住んだこともありますし、出張で行きたかったアフリカへ。黄熱病の予防接種を打つインテリアデザイナーもなかなかいないんじゃないかと思っています。

イギリスでは現地駐在事務所で下っ端として働き、今じゃ考えられないようなゴージャスな雰囲気の内装のお仕事もさせていただきました。当時は照明器具にプラグが付いていないので、プラグを買ってきてコードを切って先っちょを繋ぐ、そんな地道な仕事などですが。日本に帰ってきて、大阪もつまらないなと思っていた時に単身赴任のお話をいただいて東京に。宮崎や沖縄に出張で行かせてもらったり。最近そろそろ旅行に行きたいなと沖縄の写真を見ていると、これってもしかして私が昔、図面を書いていたホテルだわ、かつてはそういう仕事もしていたことを思い出しました。

こういうのをいろいろしていて楽しかったんですが、住まいに直結するようなことがやっぱりしたいなと。住む人の思いが繋がるほうが、お話を聞きながら仕事を進めることが性に合ってるかなと。おまけに自分が住んでいる周りで出来たらもっと自分の働きがいが良いなと。

「千里で住む／働く／楽しむ」というのは、「暮らす」ことでもある。それは千里じゃなくても、住むこと自体を楽しむのが私は好きなので、自分の家も住めば都という感じかなと。環境、住みたい所をまず選ぶことの大切さもあるかなと思っています。どんな所でもいいんだけど、良いように住めるようにしていけばいいのかなと思います。「どこでも」は、どこに住んでも都。いろんな所に住み替えてもそう思います。東京に住んでいる時も東京は嫌いと言いながらそんな気がしていました。自分が楽しめるような環境を作っていくのが大切だと思います。

どういうふうに住むか、心地よく住めるように自分で変えていく。リフォームしなくても、ちょっとしたことで快適にするようになればいいなと。どうしたら良くなるかを考えてもらおうといいかなと思います。

自分の中でここに住むのが好きと思うのは、子どもの頃からニュータウン好きだな、かっこいいなと思う理由になった1つは「佐竹台ハイツ」。祖母が住んでいた所です。男前なテラスハウス。斜面地に建つので反対側から見ると基地のような感じに見える集合住宅。スキップフロアの6層になっていて、上3層と下3層で分かれる住まいで、祖母の家は上側でした。

これを祖母が家を出る時にリフォームしました。お金もないなかで、やりたいように。吹き抜けが大きいので階段を大きく取ると楽しく使える。2人で住むのになんでこの大階段という感じですが、座って遊んだりもできます。自宅ですがオフィスにも使っていた。作り付けの家具もすべて取り外して持って行けるようにデザインしました。住みながら働くというか、オフィスが真横というか、オフィスの中で住んでいるというか。住みながら仕事をしている実践ですね。「佐竹台ハイツ」は、この時点で築37年でした。

当時は周りの公社住宅も建替話が進んでいた。「佐竹台ハイツ」は戸数が少ない集合住宅だったので、いろんな経緯で建替ではなく敷地を売って渡すという選択をしまして立ち退きになってしまった。最後までこの建物は残すべき良い建築だと言っていたんですが出ることになったので、皆さんの記憶に留めていただきたい、全部を知ってもらいたいとオープンハウスをやりました。でもクローズしてしまうので「OPEN/CLOSE展」という名前で、広く見てもらうイベントを行いました。

てフェアトレード製品を置いたり、陶芸家の友人の作品を置いたり、有機野菜を作っている人の野菜を売ったりいろいろ盛り込んだイベントになりまして「千里タイムズ」にも取材に来ていただきました。にぎやかに、打ち上げの宴会をやってるような状態。名残を惜しみながら、自分の中で納得する時間になりました。

次の住む場所を探すことになったんですが、千里の中で古い家を偶然見つけることができました。傾いてたりベランダが落ちそうで大変だったりしましたが大改修をしました。

入口は階段の向きを変えて上がりやすく。屋根も葺き替えて太陽光パネルも乗せました。この家を気に入ったのはこの大屋根がいいなど。太陽光パネルを乗せやすいなど。格子の内側にはスライド式の格子で日射を遮るように。庭は和風で植栽も残っていたのでそれも生かしました。

職業柄いろいろな材木サンプルを持っていますので、内装にはそれを貼ったり。佐竹



台ハイツに男前なカッコいいランプがあったので取り出しておいて記憶の一部として移しています。前の住まい手に置いておいてもらったもの、佐竹台ハイツから取り出したサッシなどいろんなものを使い回しています。格子の欄間は仕事用に骨董市で買っていたものを利用し、夏には風通しが効くように壁にはめ込み、冬はそれをアクリルで閉じて冷気が家の中に入らないよう地味なエコの造りにしています。また、耐震補強しつつ壁を多く取り払いました。目的として、広く使いたい。友達が来た時には宴会できるような。「宴会ハウス」という別名を付けてます。元からあった壁は木柄を残しています。

キッチンも広く作っていますが、開口部には佐竹台ハイツから持ってきた障子にアクリルをはめて天井から吊っています。キッチン側を閉じられますので、寒い朝はキッチン側だけ暖房ができます。和室は、元からあった和室の天井を取りました。丸い梁が見えてますが、これは古民家！というわけではなく、普通に屋根には丸い梁が使われていますので、それを見せる。白い縄をかけてブランコに。今まで数にすれば何百人と子どもたちが遊んでいます。



「OPEN/CLOSE」から3年、築37年で消えた集合住宅から同じ千里ニュータウンの築37年の古家へ。佐竹台ハイツから持ち出したさまざまな建材を利用して移り住みました。そこで「OPEN/CLOSE」に来てくださった方々に「Re:Open」と銘打った招待状を送り、近所の方達も「あんなにずっとボロボロだった家がどうなったのかしら」と思われている方がたくさんいたのでお招きしました。中ではまたイベント的に陶器や野菜を売ったりいろいろと。ご近所おしゃべり場にした感じで楽しんでいただきました。

今は、大人にも子どもたちにもオープン。今13歳の息子は6ヵ月からこの家で育っています。高野台は子どもは多くないですが、入りやすい角地にあるので、ピンポンなしでみんなやってくる児童館状態。子どもたちが常に来て遊んでいます。

遊ぶばかりもなんなので、「あなたたち、ちょっとお勉強しない？」とワンコイン英語塾を友達にお願いして教えてもらったり。長続きしなかったんですが、会った時には「先生だ！」と。それもご近所だから良いなと。いろいろやっていただいて、子どもたちは楽しかったと思います。

庭でも遊べたら楽しいので開放しています。庭の隅に基地を作りたいと、廃材を集めたり。しだれ梅に実がついたら、時期がくると実を取らせて梅仕事もしてもらおう。今はなかなか梅仕事もしないだろうから、いい経験になればいいなと。私も手間が省けるのでやってもらってます。

大人も宴会をやっています。キッチンを広くしたことで、うろうろしやすい空間になってると思います。これは千里キャンドルロードの新年会。30人ぐらい入っていますね。この1、2年はできなくて残念ですが。



次のご紹介は戸建てのリフォーム例ですが、ニュータウン的かなと思うので見ていただきます。初期のプレハブ。その後その平家の上に鉄骨で家を乗せられました。1階は前のまま、ご両親が使われていましたがなくなりましたので、2階に住んでいる娘さんが手入れして使いたいとご近所つなかりで相談をいただきました。

キッチン、洗面所も最初のまま。洗面台の窓は、平たい鉄をねじった格子があって惹かれるものがありました。この空間をどう使いたいかというと、上にお住まいで、下は羊毛アートのアトリエ兼ゲストルームに使いたいと。地域の人たちに開けるような場所がいいなおっしゃっていたので、前の記憶を残すようなかたちで最小限手を入れる。お金も最小限で。ブロックを白く塗ったり、扉の上にあるガラスを再利用したり。キッチンは真っ赤にしつらえ直しました。扉も塗り直すといい感じに。

和室にあった障子と木製の枠がはまった窓も最初のまま。隙間風が入るんですが、ゲストルームなのでそこまで改修しなくていいと。写真の壁にムラがあるのはご主人がご自分でペンキを塗られるということであえて下地だけ残しています。天井を剥がしてみるとコンクリートの型枠の模様が素敵だったのでそのまま残してもらいました。普段使いではないから、これは面白くていいかと理解していただいたリフォームです。洗面所の扉に付いていたハンドルも、可愛いらしいので使い回してます。

一昨年3月には依頼主のお母様が持っておられた古い雛人形を集まりの会でご披露したいということだったので和室に飾り、地域の方々に集ってもらって茶話会をされました。満月の日のお話会の企画もあるようで呼んでいただくのを楽しみにしています。

次は福祉リフォームの例です。友人のお母様が寝たきりになりトイレが遠くて大変だと。トイレをポータブルにするのも大変よねという話の中で探して見つけたのが、部屋置きの水洗トイレ。これが生活の質を高めるうえで良かったという例です。

戸建ての1階の角部屋だからできた。排水を直接外に出して排水管に繋ぐ特殊なトイレ。この横にお母様のベッドを置くことで、夜も自分でトイレに行けて、お父様も安眠できる。最後までQOL（クオリティ・オブ・ライフ）の高い生活ができて、そのお手伝いができて良かったと思います。

こういうニーズを解決するために手すりでもないし、ポータブルトイレを置くだけではないしといろいろ考えるのも、私たちの仕事かなと思っています。

家具のリフォームもしています。屋久杉の重たいテーブル。依頼主のお父様が使っておられたもの。座卓では立ち座りが大変なので加工するお手伝いをしました。食事にちょうどいい高さの足を付けました。こういう小さいことでも生活の質は必ず上がります。



みなさん、おなじみのご近所のお店もお手伝いしています。千里中央の「メガネのセンリ」さん。千里中央の中で場所を変わらないといけなくなったので、移る時にお手伝いをしました。



「木下名酒店」さんは、せんちゅうパルに千里中央店を出される時にお声がけいただきました。バス停から印象的に見えます。地酒とワインやお米も扱っています。

こちら(左)は、南千里のニュータウンプラザ4階にある「口腔ケア情報センター」。可愛いご提案で作っています。



次(右)は「yumizu」というブランドで前かけを作っている友人のギャラリーです。現在進行しているリフォーム物件は彼女のお客さんから話をいただき、これも自転車で通っています。

自分の得意なこと、興味のあることは、子どものこと。段ボールで遊ぶのも好きなので、南千里のラコルタ(市民公益活動センター)では「かえっこバザール」を5年間開催し、そのメンバーになって段ボール遊具制作やイベントのお手伝いで楽しませてもらいました。

こんな感じで、たまたまそういうことをする機会が家から2キロ圏内にあったり、千里キャンドルロードもそうですが、無理のない範囲で楽しみながら仕事にも差し支えなく、いろんなことを同時進行的にできるのがこのぐらいなのかなと、自分の中では、そう思っています。自転車でパッと駆けつけることができる範囲が心地いい。

自宅で働くメリットは「生活直結」。仕事しながらピンポン鳴ったら宅配を受け取れたり、学校から電話があると迎えに行けたりができる。それと同時に自宅で働くデメリットもあります。これもやっぱり「生活直結」ということで、集中してやってるのに洗濯機がピーピー鳴ったり。

コロナ禍で夫も家で働くようになり、2人が同時に電話で喋っていることも。同じ部屋で仕事していると、2人同時に仕事ができない場合は時差を作らないといけなかったり、部屋を変えないといけない。皆さんそうだと思いますが、なかなか難しいなという実感だったりします。近隣センターで空いているお店とかで、ちょっと働きたい時に行けるようなワーキングスペースを作ったり、息抜きをしに行ける場所があればいいなあと思いますね。

泉北では、公園でオフィスを作ってみようイベントをやってる人がいる。そんなことを、問題提起じゃないですけど公園でやってみよう的なことをしたら楽しいかも。千里の近所は緑地が多い。広い場所を使えるようにしていけると面白いかなと思ってます。

これは13年ほど前佐竹台ハイイツで小さな鉢に咲いていたハイビスカスと3日前に撮った写真ですが、こんなに伸び伸びと大きくなっている。時間が過ぎていってるんだなあ。その間に感じることも変わっていったり、知り合った人も多い。近所でこれだけさせてもらってるのは、私がここにいるからなんだろうなあと思っています。

私からの話は以上です。ありがとうございました。



## 奥居

ありがとうございました。岡本さんは身の回りを楽しむ達人。家がまちのようであり、まちが家のよう。お互いにじみ出して、いろんなことをやってらっしゃる。そこにコロナがやってきて、毎日通勤するスタイルが見直されて、たまたま岡本さんの時代になってきたのかなと思ったり。今のお話で、ヒントになることもたくさんあったのではと思います。

続いてはランドスケープデザイナーの吉武宗平さん、よろしくお願いします。

## 千里のまちを私的に住みこなす

### 吉武

本日はよろしくお願いします。岡本さんは自分の住まいをオープンにしなが、まちの人たちや私的な活動を自分の家に引き込んで、まちとの関係をうまく作りながら暮らしているというお話でした。

私の場合はマンション暮らしで家もそんなに広くありませんので、むしろ自分が外に出ていきながら、自分の生活領域を外に拡大していくことで、自分とまちとの関係をうまく作りながら暮らしていこうと。そういう観点でお話をさせていただきます。

いろいろ考えて「千里のまちを私的に住みこなす」というタイトルを付けました。私自身まだまだ住みこなすまでには達していませんが、そういう思いを持ちながらこれまでやってきたことやヒントになるような事例のお話をさせていただくことで、今回のテーマである「千里で住む、働く、楽しむ」につながればと思っています。

私はランドスケープデザイナー。最近、ランドスケープ・アーキテクトと名乗っています。公園や広場、建物周りのデザイン。大きいものから小さいものまで、人々の生活に関わる屋外環境全般のデザインをする仕事です。青山台での仕事もあります。

きょうは、私が千里で関わってきた話を中心に話します。ランドスケープ・アーキテクトとしては、大阪の「鳳コンサルタント」という設計事務所に所属しながら個人事務所として「ワイズランドスケープ」を立ち上げて活動しています。

その一方で、去年4月からは大阪芸術大学で教員としてランドスケープデザインを教えています。酒飲みです。

20年前の2002年に豊中に引っ越してきました。東泉丘という千里ニュータウン外れの場所に、ほんの腰掛のつもりで引っ越してきたのですが、住んでみると職業柄、身の回りの住環境やとくにみどり環境に関心を持つようになって、子どもが生まれたタイミングでしたので、子どもを遊ばせながら家の周りを徘徊して、興味を持ったことをブログ(千里逍遥)に書いていました。



そのブログを通じてさきほどの岡本昭子さんと知り合い、2012年、岡本さんに誘われて千里キャンドルロードの実行メンバーに加わりました。これによって私の千里のまちとの関わり方が劇的に変わっていくことになります。

2015年、住んでいるマンションの自治会の役員が回ってきました。それまでにも回ってきたことがあったんですが、ほとんど何もせずやり過ごす感じだったんです。ところがキャンドルに関わった経緯があり少しずつ意識が変わって行って、いくつか新しいことにチャレンジしながら積極的に楽しんでやろうと。

そういうことを重ねていくなかで、ほんの腰掛のつもりで住んでいたんですが、住んできた賃貸を買い取って、いよいよ腰を据えることを決めるに至りました。

そうやって楽しく住んでいたんですが2020年からコロナが本格化して、近隣との付き合い方も変わっていきますし、私の働き方も少し変わっていく。2021年から大学の教員をするなかで研究と実践のフィールドを探していくわけですが、千里のまちに関わっていくのも面白いかなと思い始めているきょうこの頃です。

ブログ「千里逍遥」は今もウェブ上に残骸がありますのでご笑覧ください。

<https://2008-0405.at.webry.info/>

千里には安全な歩行者ネットワークがあって、それを伝って子どもを連れて散歩したり、近隣センターまで行ってみたり。どんぐりがいっぱいになっている山に行ってみたり。その山は昔はどんな地形だったのか、職業柄ですが昔の地図を重ねて昔の風景を思い浮かべてみたり。二ノ切公園に冬でも青々としたみどり。これは雑草なんです、それがどういふもので構成されているのか調べてみたり。家の周辺に田んぼや竹林、桃山台の駅前にはツバメがやってくる風景もある。私なりにまちの魅力を発見しながら暮らしていました。

今はなき佐竹台ハイツ。ここで自宅を見せてくれるという人がいて見に行きました。それが岡本さんのお宅だった。そこで岡本さんと接点が生まれました。私にとっては千里のまちとの関係が変わっていくきっかけになりました。2012年から千里キャンドルロードに参加して、会場デザインの役割をもらって関わっていくことになりました。一晩かぎりのイベントですが、メンバーそれぞれが役割を考えながら情熱を注いだり、紙コップを絵を描いてもらうために地域の学校や保育所と関係性を持ったり、お金を集めるために地域のお店や企業と関係を持ったり。実行にあたっては、吹田市・豊中市の職員とガッツリとタッグを組んでプロジェクトを進めていったり。

そういう環境の中にどっぷり身を置くと、まちの中になんとなく自分の居場所を見出せたような気が。まちのことを自分のこととして捉えられるようになってきたという気がします。息子は一人っ子なので、キャンドルは学校とは違う社会を見せる良い機会になりました。彼にとっては兄弟のような関係の付き合いも生まれてきましたし、私自身も愛媛出身で大阪には親類縁者がいない。このメンバーの人たちがある意味、親類縁者のように思える関係になってきた。中にはめんどくさい親戚のおっちゃんもいたりしますが、それも含めてまちの人たちとの関係性がぐっと広がって、それにとまって私的な生活領域も広がってきたように思います。

2014年には、キャンドルメンバーからの情報で青山台で「住人祭」があると聞いて見に



行きました。自治会の他に「UR」「無印良品」と企業のサポートが付いた大々的なイベントですが、基本的には住民の手作りで、みんなが料理を持ち寄って、みんなで食べるイベント。住人祭はもともとフランスのパリで始まったイベントで、コミュニティを育む催しとして、各地に広がっていった。最初にポスターを貼ってみんなに呼びかけて、みんなでご飯を持ち寄ってやる。それだけ。簡単な方法で楽しい催しができること知りました。

その翌年に自分のマンションの自治会役員が回ってきます。このマンションは300世帯ほど。全世帯が自治会に加入。世帯ごとに月100円の会費を集めている。30万円ぐらいの会費になりますが、それまでは活動がそれほど活発じゃなかったので予算が消化できず、バスツアーを組んでごく一部の人が参加することしかやってなかった。そういう状況にある人から「いかがなものか」と。もっと多くの人に還元できるようなことをやりましょうという議論が始まりました。

商品券を買って配布してはどうか。いや、それでは何のために会費を集めているのか。何のための自治会なのかと。そこで私から「住人祭」やってみませんかと話したところ、あまりピンときてなかったようですが他に案もないしやってみましょうかとなりました。

キャンドルの経験がありましたので、広く実行メンバーを募集して、持ち回りの役員だけではなかなかモチベーションを保てないので、やる気のある元気な人たちも呼び込んで進めていく。突っ走ってもよくないのでアンケートもとりながら進めていきました。

コンセプトは青山台と同じ。「みんなでごはんを食べる」。1つの大きなテーブルを囲んで、一時にみんなで過ごす。それ以上はあまりやらない。頑張るすぎないで始めたいと思っていました。

みんなで話し合っ、マンション前の通路に大きな20mを越えるケヤキがあり、その下にちょうどいい木陰ができる場所がある。そこにテーブルを並べてつないで、みんなでごはんを食べようと。ケヤキの下でやるので「けやき祭り」という名前にしました。ポスターは、役員に絵本作家さんがいらっしやっ、ボランティアで作ってくれました。その後いろんな自治会イベントのチラシを、プロの絵本作家さんが書き下ろしてくれるという贅沢な。表に出しても自慢できるようなことがいっぱいストックされていくことになりました。

最初は、ごはんを持ち寄ることに主婦層から抵抗があったので、オードブルで。とにかく、みんなでごはんを食べようと。中にはこだわりのある人がいて「千里に住んでるんだから竹を使って流しそうめんをやりたい」と。俺が責任を持ってやるというので、じゃあよろしくと。これも盛況でした。

翌年以降は、奥さん連中がもうちょっと料理を工夫したいねという話が出て、カレーを作る。ごはんにかけていいようにパンで挟んでちょっとオシャレにして出したり。その翌年にはおっちゃん連中が鉄板で焼きそばをやりたいと。自分で鉄板を借りてくるからやらせてくれと言うので、じゃあよろしくと。鉄板焼きや焼き鳥を焼いたり。

個人の最初の思いとしては、あまり頑張り過ぎないでやってほしいというのがあったん



ですが、それぞれがアイデアを出しているいろんな人たちが自分事として振る舞い始めるのが、頼もしいというか素晴らしいなど。

食事の合間にも個性を発揮する人がいっぱい出てきて、たとえば子どもたちの余興。当日まで何をやるか全然教えてくれない。「任せてください」と。「けん玉大会」や「リフティング」、これは女の子に有利な「前屈大会」。子どもたちを集めてちょっとしたことを上手に盛り上げてくれる人がいたり。あと「腕相撲大会」。女性の部の決勝は、3人の子どもの持つお母さんと女子高生の決勝戦になりました。火花を散らして場を盛り上げる人が出てきたり。「じゃんけん大会」の司会は当時の持ち回りの役員の方。この人も子どもを乗せるのがすごい上手。子どもが生き生きと楽しんでいる。向こうでは息子も見守ってる。



古いマンションなので親子二世代で住んでいらっしゃる方も多いんですが、日頃では垣間見れない、いろんなキャラクターの人がいることがわかってきました。

奥様たちは子どもたちを楽しませたいと「輪投げ」を企画して、景品は松屋町筋で買ってきたり。子どもだけじゃなくて、大人も楽しめないとダメでしょと「千本引」を企画してくれたり。「私、隅っこで紙芝居やるわ」という人もいました。昔、児童館でそういうことをされていたそう。図書館で紙芝居を借りてきて、隅っこでヒマそうにしてる子どもを集めて紙芝居が始まりました。絵本作家の方が自宅でかたつむりを飼って卵を産んで赤ちゃんがいっぱいできたと。子どもたちに参加賞として配って、育て方を教えるオリジナルの絵本を作ったり。

同時多発的にいろんなことが、いろんな人の企画で行われていく。人それぞれのパブリック精神といますか、そういった人たちがマンションの中にたくさんいることがわかっていくわけです。これはマンションの中の話ですが、マンションはまちの縮図のようなもの。千里のまちの中にもこういう人たちはたくさんいるだろうと思います。

うちの自治会には活動の三本柱として、「イベント活動」の他に「福祉活動」と「防災活動」も掲げています。福祉をまとめている方は「緊急時安心シート」を作って、高齢の方に緊急時に必要な情報がわかるように啓発したり。防災については、消防署の方にお話をしていただきながら消火訓練をイベントの中で一緒にやる。多世代いろんな人たちが関係性を持つことが、マンションを住みこなすことにもつながりますし、その延長線上にまちを住みこなすことにもなるんだろうと思います。



防災の一連でかまどを買い、2017年度、私が自治会長を引き受けたのでその間にいろいろやってやろうと。防災という名のもと、餅つきセットを買って「餅つき大会」をやったり。たけのこ狩は自治会の恒例行事でやってたんですが、やっぱりみんなで一緒に食べないと面白くないでしょと、近くの公園を借りてやってみた。マンションの敷地内でもできるんですが、公園でやってみよう。まちに出ていった。そこでかまどを使って、たけのこをみんなでいっしょに食べたり。



芋掘りもやってたんですが、やっぱりみんなで食べたいよねと。ふ

かして食べるぐらいを考えてたら、奥様たちが自発的にいろんな料理を作ってくれたり、さっきの前屈を企画した方が子どもたちを集めて「椅子取りゲーム」を始めたり。

そうやって 2019 年までいろんな活動をやって軌道に乗ってきましたが、2020 年から新型コロナウイルスの影響で、すべてのイベントを活動できない事態に。自治会の集まりさえできない時期もありました。活動を模索するなかで、「お助け隊」というアイデアが出てきた。独居老人や高齢者のお手伝いをみんなでやりましょうと。粗大ゴミを出したり。バッテリーがあがったらお互い助け合いましょうとか。マンションの敷地内に竹林があって、そこで生えるたけのこを取ってみなさんに振る舞ったり。自治会の補助的な組織として立ち上がります。自治会は持ち回りですが、お助け隊は登録制。ずっと継続してできるので自治会活動の継続性を補佐するような組織ができあがってきた。

今年の元旦からは私の発案でお助け隊に呼びかけて、朝のラジオ体操をやりませんか。私自身、早起きの習慣をつけたかったというのがあります。自治会を超えてもう少しまちの人たちとつながっていくような活動ができないかと。まん延防止期間が開けたら、広く広報したい。酒を飲みながら作ったポスターには、ゆるくつながっていくことを強調。自治会を超えて周辺の人ともつながる場になればと思って、3月にはできたらいいなと。1月2月は細々とやってましたが、3月になるともう少し広がってやっていけないかなと思っています。



## 「マイパブリック」と「パブリックハック」

ここからは私的にまちを住みこなすためのヒントになるような事例を紹介したいと思います。

1 つは「マイパブリック」という考え方。『マイパブリックとグランドレベル』という、田中元子さんの本があります。マイパブリックとは、自分で作る公共のこと。あればいいなと思う公共は自分で作ればいいんだという考え方です。

これまで公共はみんなのものということで、ひるがえって言えば他人のものであって私のものではないというとらえ方がされている。それに対してもっと自分が主体的に関わって、公共を自分事としてとらえて振る舞おうという考え方です。

世の中にはマイパブリックを実践している人たちがたくさんいると紹介されています。たとえば家の前に灰皿を置いて、タバコを吸いにきた人たちと会話を楽しんだり、公園の水辺で絵を描いて子どもを楽しませたり。コンビニの中を DJ ブースに変えて商売しながら DJ イベントをやってみたり。屋台を引いてフリーアドバイス、人生相談をやったり。こういった人たちのことを著者はマイパブリッカーという名前を付けている。そういう人たちを集めた祭典、マイパブリッカーが集まるイベントをやってみたり。著者自身も自前のパーソナル屋台をデザインしてコーヒーを振る舞い、いろんな人と会話をするという趣味を持って実践しています。

著者の趣味の三原則、人が幸せだと感じるのに必要な 3 つの要素は、「自分を満たす趣味」「他者と楽しむ、交流する趣味」「社会や世の中に貢献できて役に立てる趣味」。この 3 つを

実践している。その延長線上で 2018 年に「喫茶ランドリー」という場所を作られました。コインランドリーだった場所を自分たちのコワーキングスペースとして使いながら、いろんな人たちが集まれるカフェに。フリースペースを併設した場所として、まちに開いた場所を作っています。

グランドレベル（1 階）はプライベートとパブリックの接点だと。まちづくりをするのは 1 階作りであると。そのコンセプトの実験場のような場所を作っておられます。

2 つめは「パブリックハック」という考え方。公共空間において「個人それぞれが生活行為として自然体で自分の好きなように過ごせる状態」。そのためには公共空間が私的に自由に使えることが大事だと。『PUBLIC HACK: 私的に自由にまちを使う』著者の笹尾和宏さんたちが実践しているパブリックハックが紹介されています。

簡単どころでいうと、夕日の時間にお気に入りの場所を見つけて夕日を眺めることだったり。椅子を持ち出してお気に入りの場所ですたすむ。それも 1 つのパブリックハック。手すりにクランプを付けて仮設のテーブルを作ってみんなでご飯を楽しむ「クランピング」。邪魔にならない所にテーブルを広げてディナーを楽しむ「水辺ダイナー」をやったり。「流しのこたつ」、まちの隙間にこたつを出して通りがかりの人も自由に入っている。仲間で屋外で映画を楽しむ「芝生シアター」。公園で演奏会をやってみたり、路上で「0 円ショップ」、モノを無償で提供したり。いろんなパブリックハックの事例が紹介されています。

そうしたことを、ただ無秩序にやっていると迷惑行為につながりかねない。ちゃんと法的なことを遵守しながらやっていくという最低限のルールは守りながらやってる。それ以上に大事なことは、周りで見ている人が迷惑行為だと思って通報者になってしまわないような配慮も必要。一定のルールやモラルの中でパブリックハックを進めていく必要があると書かれています。

つい最近、「京都新聞」にこういう記事が載っていました。宇治市の公園にハンモックなどを無許可で設置した男性が都市公園法違反の疑いで京都府警に逮捕されたと。彼は子どもたちがもっと創造的に遊んでほしいと、ハンモックを持ち込むんですが保護者からケガしたら危ない、管理者もケガされたら責任をとれないと再三注意したにもかかわらずやめないということで逮捕に踏み切ったと。すでに釈放されていて地方ニュースのインタビューで彼の音声は流れていましたが、全然悪びれることなく今も過ごしている。

こういうのを見ると、行き過ぎてしまうと、マイパブリックもパブリックハックもひずみも生んでしまう。この人に仲間がいてうまくバランスがとれれば、すごく良いことだと思いますし、いろいろと考えさせられました。

最後に個人的な構想というか妄想を。次世代型の千里ニュータウンに向けた展望。きょうお話ししたような私的にまちを住みこなすような風景が広がるまちを描けないかなと。描くうえで骨格となるのは、「点」「線」「面」。

「点」としては近隣センターであったり、「線」として繋がっている歩行者ネットワークを魅力化していくことで町全体につながっていくのではないかと。「面」としては住宅地の住まい方。岡本さんのような使い方の実践者がいっぱい増えていくことでまち全体が私的な住みこなしの風景がつながる魅力的なまちになるんじゃないかなと考えています。

いっぺんに全部はなかなかならないと思いますが、部分的にでも実験的に何か面白いことをできないかなと思っています。そんなことをやってみませんかと投げかけをして、私の話を終わりたいと思います。

## 奥居

ありがとうございました。すごく素敵なヒントがいっぱい出てきたと思います。

ここからはご参加の皆様にもコメントをいただいて、ざっくばらんにやっていきたいと思います。岡本さん、吉武さんに聞きたいことはありますか？岡本さんはインテリアで室内、吉武さんはランドスケープで外ですが、お互いにじんで繋がっているかなと。「住まいのセミナー」のトータルテーマが「まちとつながる住まい」なんですけど、まさにそういう感じだなと思います。

吉武さんは仕事をバリバリしている人というイメージが最初はあるけどもそうだと思いますが、お話を伺っていると、どんどんコミュニティぽく、千里ニュータウンの沼にハマってきてる。10年経つと人間はいろいろ起きるなあと感慨深く。そこに私も絡んでいたり。沼にハマってるのはみんな一緒なんですけど。

## 吉武

丸くなりましたよ。(笑)

ランドスケープの世界も今までは「庭」「造園」と捉えられていたんですが、とくにアメリカではコミュニティの問題とかQOL(クオリティ・オブ・ライフ)、生活の質に深く関わりを持つと明記されていて。そういうことは私の仕事の中でも大事だと思いながら、とはいっても実務の中ではなかなかそういうところに立ち入れないことが多々あり、その不満な部分をこっち(千里)で晴らして。どこかでうまく繋がるかなあという思いを持ちながらやってるのが今の状況です。

## 奥居

とある建築畑の方から伺ったのは、建築はできた時が一番綺麗で美しく完成されていて、使いこなされるとだんだん崩れていくと。だから、出来上がった時の竣工写真がベストの状態なんだという話を聞いてびっくりしたんですが、こなれた形にしていくのは住民の立場ですよね。それで面白くなっていく。庭でも作った時は綺麗でも植物は変化しますから、ずっと同じということはないですよ。

## (参加者)

私は造園の仕事をしていて、個人のお庭を触ることが多いんですが、吉武さんの話を聞いていて個人だけじゃなくて、まち全体と関わるような庭づくりをしていきたいなど、きょうのお話を聞いて考えさせられました。

## 奥居

個人宅もされるし、公共スペースも。千里ってやりがいがないですか？いろんなスペースがあっても面白いんじゃないかと思っています。

### **(参加者)**

マンションの植栽工事もさせてもらってます。そうですね。まちにみどりがとにかく多い。その場所だけじゃなくて、まちに溶け込む感じが作っていて気持ちいいですね。向こうに見える街路樹や公園の木も自分の庭のように見えるとか。

### **奥居**

つながっていくと、お隣の庭も自分の庭みたいな。連続性のあるのが、都心のカチッとしたものとは違う特長なのかなと思いますね。

### **吉武**

2017年のセミナーでお話したのは、個人の庭、とくに戸建ては大きい庭を持っている。いろんな段階性があって、みどりがあるというだけで街路にみどりの景色を提供している。そういうつながり方が第一段階。もうひとつ踏み込むと、オープンガーデン。季節の良い時にお客さんを招くことをやってみて、そこで会話が生まれるような住まい方もある。みんなでやる必要はないけど、さっきのマイパブリッカーのように出てくると、もう一段階面白くなるなあと。

ガレージに高級車が止まっていて閉鎖的な所もあれば、車に乗っていないからとガラッと開いているところもある。ガレージを使って、まちに開く住まい方をされる人が出てきても面白い。勝手な妄想ですが。

その人の住まい方、暮らし方の意識に頼る部分ではありますが、そういう暮らし方が次世代に向けて実践する人が増えてほしいなという思いがあります。

### **寺脇**

僕もガレージを使って事務所やお店、みんなが集まれる場所、フリーマーケットとかいろいろ可能性はあると思います。ガレージは住み開きとはちょっと違って、比較的隔離しやすいとか提供しやすいような条件なので良いなと思っています。実は、北千里駅周辺で何軒か声をかけたんですが、みんな断られまして、それ以来止まってるんですが、徐々に状況は変わってきてると思うんですよ。

吉武さんや岡本さんの話を聞いていて思ったんですが、建築は今まで造ることに集中して使うということにあまり目がいってなかった。自分の土地や、近隣センターは自分が権利を持っていることで利用がかなり制限されていたとか、あまり工夫がない利用がされていた。空き家や空き店舗が増えている状況です。

それが最近、共有やシェアすることで何か変わるんじゃないかという空気が出てると思うんです。きょうのお話を聞いて造ることよりも使っていこう。所有するというより、みんなシェアしていこうと。そういう話なのかなと思いました。

### **奥居**

岡本さんの家もいろんな人が出入りしている。改装後、門扉も取っちゃっているんですね。

## 岡本

住む時がちょうど子どもが生まれる時だったのでベビーカーや買い物荷物を持って上がり下がりする時に一手間。前の通りに傾斜がついているので手を離すとベビーカーが溝に落ちてしまう。具体的なことを考えれば考えるほどそんなものは要らない。

小学校にあがれば、子どもたちが入ってきやすい。泥棒はオープンすぎて入りにくい。角地なので外に開けていて人目につきやすい。いろんな意味でオープンだと、門扉をまず取ることを考えた。階段の数を減らしたり。おまけに玄関扉も透明なので、防犯上は有利なのかもしれない。外に立ってれば見えるのは、常にまちを見ている状態にしていますね。だから子どもたちもそのまま入ってきます。今の子どもたちは礼儀正しくてピンポン押して待つてますけどね。

## 奥居

オープンにしたほうが防犯上は有利。囲いこめば安心ってもんじゃないんですね。

## 岡本

玄関が隠れてしまうのは不利ですね。

## あかりで千里をドラマチックに

### 奥居

2019年のセミナーで講師に来ていただいた環境照明デザイナーの豊留さんもきょうはご参加いただいています。

### 豊留

こんにちは、豊留です。私も会社を定年退職して、自治会活動に興味があって、ちょっとやってみようかなと。そう思ったのは、働いていた頃、香里団地の近くに住んでいて、香里園の自治会がしっかりしていて気持ちのいい通勤空間だったんです。住宅街を歩いて駅まで行く途中で、わたしたちの通勤もそうですが、自治会の方々がいろいろと子供たちの通学のサポートをされていました。街がきれいだったり、いい雰囲気を作ってくれているのは、自治会や地元の人たちがいろいろ応援してくれていたから気持ちよく通勤していたんやなあーと感じまして、自治会に恩返しせなあかんなんて思って自治会に入ったんです。

吉武さんのように、いろんなことを香里園の自治会もやっていて良いことだなと思っていたんですが、新型コロナの影響でだんだんと薄れていっている。残念さもあり何とかしたいという気持ちを持ちながら今日のお話を聞いています。

さきほど紹介がありましたように、「あかり」の話を見せてもらいました。本当は、私の専門は、住まいのあかりというよりも、吉武さんのようなランドスケープデザインの中のあかりの分野です。いつも思っていることなので、今回を機会に外回りのあかりについてちょっとだけお話しします。

楽しみ方についてのお話の要望でしたので、吉武さんの「住みこなし」という言葉いいな

ということから、あかりをもう少し上手に住みこなすための使い方が、屋外空間においては特にあると思うんです。

公私ともに私的な空間も公共空間であったり、公共空間も私的な一つの要素だと思いません。ずっと照明をやって思うことは、日本の公共空間の照明は安全、安心でまんべんなく照らす空間が多いんです。たとえば、人が美しく見える照明を、映画じゃないですけど、プラットホームに立っている二人がドラマティックに見えるような。出会いと別れが何気なくドラマティックに見えるような光環境を作れると思うのですが、なぜか均一に照らす。安全、安心が第一になってしまっている。J I S 基準など、そういったものを大事にしながらも、もっとドラマティックな光環境を作れるんじゃないか。特に、千里のまちにはいいのではないかと。全域をやるのは大変ですので、出会いと別れの空間だけでも。プラットホームや玄関、施設の出入り口などちょっとした空間だけでもドラマティックな空間に変えるだけで、何気ない空間の良さが心に残るようなことができてくるんじゃないか。

ドラマティックな千里のまち全てではなく、ポイントが良い。使いこなし住みこなしの中で、ここへ行くと出会いと別れがドラマティックな気分になれる空間を作れて利用していただけたらいいなと。

もう一つは防災の観点です。防災の照明環境は夜間訓練がやりにくいなど、どうしても夜間防災に取り組めないんです。安全安心の防犯灯で精いっぱい、なんとかしないといけないんじゃないかと。たとえば、夜間防災のライトアップをもう少し考えられないかと。千里キャンドルロードのようなコミュニティが十分できている中で、そういったことができるのではないかと。夜間防災のあかりを形成できるのではないかと感じています。夜間のバリアフリーもそうですし、避難経路も。シンボルロードや避難経路にあかりを置いて並べていく。それをイベントを通じて学習する。日本の「まつり」ごとで言えば、自然災害と五穀豊穡、つねに神への感謝と畏怖の念を抱き、引き継いでいく「まつり」ごとを考えたときに、防災と夜のまつりごとを合わせることで、あかりを上手に使えないかと思えます。

今は LED でもいろんなことを楽しめます。100 円ショップでも売ってますし。そういったものを使って行灯を作って避難経路や防災ルートをみんなで照らして楽しみながら学習していく。そんなことをやれないかな、できたらいいなと、まちあかりをやってきた中で感じています。

## 奥居

あかりのリテラシーを上げていくこともできると思います。2019 年、豊留さんにお話しいただいた時に紹介された家の例を見ていただきます。



## 豊留

良い空間だと思います。玄関口であったり、ちょっとしたことで印象に残る風景をそれぞれが作っていただけたらいいんじゃないかなと。これは住まいの入口ですが、公共空間の中でもやっていけるんじゃないか。全部をやるとお金がかかるので、駅前のポイント的に。ここは気持ちいいなと思える空間を作っていくといいんじゃないかなと思います。

光というのは、どんな空間でもライティングによってガラッと変わります。使いこなしの

意味で、あかりを上手に使っていただきたいと思います。

## 奥居

ポイントで照らしながら、しっかり足元は見える。全体を明るくしていないところにドラマチック性があるんですね。もうひとり千里の沼にハマりかかっている英語の先生も、きょうは参加していらっしやいます。

## (参加者)

昨晚も岡本さんちで子どもたちとゲームをしていました。私の出身は福岡で10年前に千里に越してきました。仮住まいだったので、千里に住んでいるかぎり千里キャンドルロードの活動に関わろうと。去年の今頃に引っ越すことができ、これから正式に千里ニュータウン住民として永住することになりました。

千里キャンドルロードに繋いでくださったある方が、私の人生の道を作ってくださいました。ここに住んでいて感じるのは、千里キャンドルロードやいろんな活動が千里ニュータウンの中で行われてきていて、自由に参加できる環境だったり、それぞれの世代を超えて仲間ができるという空間が外から来た人にとっても親切なまちだなと感じています。

奥居さんからいただいた言葉で印象的だったのは、「千里は伝統がない新しい町。今、住んでいる私たちが新しい文化を作っている」と。千里キャンドルロードもこれから長い将来にわたって、このまちの文化を作っていくんだと思うとやりがいというか、このまちに来た意味を感じてうれしいです。

最近、宝塚の清荒神などに行くと歴史や誇りを感じたんですが、これからの千里ニュータウンがこの先、何十年、何百年と続いた時に私たちがこのまちを守ってきた誇りというのをどのように作っていけばいいのかを考えていけたらと思います。

## 奥居

ありがとうございます。何かの縁で千里に捕まって。ややこしいおっさんや、お節介なおばさんもいて輪っかが広がっていく感じが面白いのかな。巻き込みに入ってくださいと楽しいと思います。

## (参加者)

私も子どもに関わる仕事をしているので岡本さんのように自由に子どもたちが行ったり来たりできる環境を地域全体で作れると、すごく生き生きとしたまちになるんだろうなと感じました。

## (参加者)

私は京都から参加してます。京都の人間は京都に生まれただけで自慢したがる場所があります。さきほど築37年とありましたが、あのレベルで古いと言われるのが不思議。自宅も最近新しい工法の住宅に変えたんですが、近所でもほとんど伝統的な工法の住宅は老朽化している。仕方なく更地にして一般的な住宅に建て替わってきている。お寺も貧乏で維持ができない。京都でも観光地は何とかなるかもしれないけど、一般的な住宅は消えていっ

てます。非常に寂しい。

30年ぐらい前、千里が元気だった頃、千里に住む知り合いを訪ねると、集合住宅の外観はそんなに古い感じはしなかったが、中に入るとコンクリート住宅の特徴かもしれないけど、くたびれてる感じがした。それからしばらくして減築や新しいタイプのリフォームが提案されてきましたが、それでは根本的に解決できないなど。高島平とか高層の集合住宅の維持をしていくのに良い手はないのかなど。

きょうのお話を伺うと、リフォームや環境デザインに対する考え方が変わってきたのもあるでしょうが、それ以前に住んでいる人の意識ですね。住民が生き生きしていると街並みが変わって見える。そんなことを感じて、喜んでいます。

京都の北のほうに住んでいますが、近所はいつも子どもが道路にあふれてるんです。クルマのないガレージを使って遊び場としている。地藏盆などのイベントや花火を持ち寄って遊んでいた。親や大人は黙って見ている程度ですが、非常に楽しい。普通の近所付き合いですがみんな仲が良いんです。当たり前感じがうれしい。市道の路地だけクルマで通る人より、そこで遊んでる子どものほうが偉いという環境。京都自慢になりました。

## 奥居

ありがとうございます。千里は60年、京都は1000年。京都の背中も追いかけて頑張りたいと思います。

## (参加者)

多摩ニュータウンから参加しています。千里とはニュータウン同士のご縁で十何年のおつきあいになります。きょうの話を聞いて千里いいなと思いました。ランドスケープにしても、インテリア、建築にしても人がホッとできていいなあ、ここに暮らしていて幸せだなあと思うような空間を作るために存在してると思うんですね。

建築家の方々の一部は、建物が良ければ幸せをもたらすとか、先にハードがあれば中のソフト、人間たちが幸せになると考えているようですが、これからは多摩も千里を見習って、人が幸せを感じるようなまちになっていくように努力していきたいと思いました。

## 奥居

ありがとうございます。多摩ニュータウンも素敵なまちで、何度見に行っても面白いです。最後には吹田市立千里図書館の鬼東さんから参考図書のご紹介をいただきます。

## 鬼東(吹田市立千里図書館)

吹田市立千里図書館では、2月に大人向けの一般図書で「住まいを考える」をテーマに本を置いてみましたら、貸し出しが多くて関心の高さを感じました。

岡本さん、吉武さん、千里パブリックデザインさんからブックリストを3冊ずつ紹介いただきました。気になったものがあれば借りてみてください。

まずは吉武さんからご紹介いただいた本。

●『風景にさわる』長谷川浩己（丸善出版・2017）

●『プレイスメイキング』 園田聡（学芸出版社・2019）

●『マイパブリックとグランドレベル』 田中元子（晶文社・2017）

プレイスメイキングやランドスケープという言葉は知らなかったのですが、そういう人にも参考になるのではと思うのは●『ランドスケープの夢』 高野文彰／高野ランドスケープ・プランニング（建築資料研究社・2020）。大判のサイズで写真もいっぱい載ってます。著者が作ってきた風景を見ることができるので、イメージ作りに役立つ資料かなと思います。

## 吉武

私からもおすすめしたい本です。著者の高野さんは去年なくなられたんですが、素晴らしい本ですのでぜひ。

## 鬼束

岡本さんからは、●「住む。」（泰文館）という雑誌。図書館には1年分あります。

●『やらなければいけない一戸建てリフォーム』 高橋みちる（自由国民社・2020）

●『荻野寿也の「美しい住まいの緑」85のレシピ』（エクスナレッジ・2017）

岡本さんは今住んでいる家を良くしていこうと話されていましたが、すぐできることがあるんじゃないかなと思ひまして、千里図書館からのおすすめは●『心地いいわが家のつくり方』（主婦の友社・2017）。すぐ変えられるのはインテリアなんじゃないかと思ひ、紹介させていただきます。アンティーク調やコンクリートなど、どれが自分好みかなとっぱいの写真から選ぶことができます。どんな配色や配置があるのかを自分の好みに合わせて、こういうのがいいと探しやすい本です。

千里パブリックデザインさんからはニュータウン関係の本を3冊紹介いただいています。

●『ニュータウン再生』 山本茂（学芸出版社・2009）

●『日本のニュータウン開発』 住田昌二（都市文化社・1984）

●『やとのいえ』（絵本） 八尾慶次（借成社・2020）

加えて図書館からは、ニュータウンとはどういうものなのかと、日本全体のニュータウンがどのように発展してきたかがわかる●『ニュータウン誕生』（多摩市文化振興財団／吹田市立博物館・2018）も紹介させていただきます。

千里図書館では、吹田に関係している本を地域資料として同じ棚に並べています。ニュータウン関連の資料も多く並んでいますので、来館の際はご覧ください。今回のリストの図書は、千里図書館以外の館で所蔵しているものもありますが、ご予約していただいたら千里図書館に取り寄せて借りることができます。

## 奥居

ありがとうございました。岡本さん吉武さんから推薦いただいた本は全部、吹田市立図書館にあるとおっしゃってすごいなと。同館は、南千里駅前の千里ニュータウンプラザの3階にあります。2階には「吹田市立千里ニュータウン情報館」。ここでも千里の資料をいろいろ集めていますので、ニュータウンに関心のある方はぜひお立ち寄りください。

豊中市、千里中央のコラボには、「豊中市立千里図書館」があります。同じ千里図書館と

いう名前ですが、2館は吹田市立と豊中市立で、チェーン店ではありません。こちらにも千里の資料が多数ありますのでお立ち寄りください。

きょうはたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございました。岡本さん、吉武さん、コメントをいただいた皆様に拍手を送っていただけたらと思います。これからも千里ニュータウンに関わるセミナーや企画をしていきたいと思っています。身の回りから暮らしを楽しくしていくことを少しずつ実践していけると、まちは楽しくなっていけるかなど。コロナであろうと、それも逆手にとってみんなで楽しく暮らしていければと思っています。本当に皆様ありがとうございました。

主催：一般財団法人 千里パブリックデザイン  
共催：吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議、  
吹田市立千里図書館  
文字起こし：AKIRA text create 山本晶